

学校カウンセリングに関する国立大学と附属学校園との連携 —スクールカウンセラーと養護教諭を対象とした聴き取り調査

Cooperation with National Universities and their Attached Schools
concerning School Counseling
—Through Interviewing with School Counselors and School Nurses

相澤直子*
Naoko AIZAWA

尾崎啓子**
Keiko OZAKI

【はじめに】

公立学校へのスクールカウンセラー（以下、SC）の配置は、平成7年度から順次拡大され、既に全国の公立中学校に於いてはほぼ100%の配置となり、小学校や高等学校への配置も増えつつある。

一方、国立大学附属学校園（以下、附属校）では、未だ50%の配置である（常務理事会報告2005、2009）。附属校は各都道府県の先進的な研究の推進校として、特に教科教育の領域ではモデル校的位置づけにある。それと比べると、教育相談やメンタルヘルスに関する校内体制は、SCの配置状況からみても、公立校に遅れをとっていると言っても過言ではない。

筆者らは、これまでカウンセラーの立場から、附属校の教育相談やメンタルヘルスに携わってきた。また平成21年度からは、正式に附属校のSCとして勤務するようになった。そのような活動を通じて、吉田(2011)と同様に、附属校ならではの学校の特性や問題を感じている。公立校と異なり、地域や教育委員会から距離を置いた立場に位置する附属校では、地域や教育委員会に代わる後ろ盾、またはサポート資源として、設置母体の大学との連携が重要になる。

現状では、附属校へ配置されているSCが少ないこともあり、附属校におけるSCの実践報告は多くなく、特に大学との連携に触れた論考はほとんどない。

そこで本研究では、学校カウンセリングに関する国立大学とその附属学校園との連携の在り方について、実状と課題を整理し、より有効な形を模索し提言していくことを目的としたい。本年度はその端緒としての予備調査を行い、特に本稿では、SCと養護教諭を対象にインタビューを実施した結果を報告する。

【方法】

平成24年度1学期に、首都圏にある4つの附属校を

訪問し、SCと養護教諭それぞれから、インタビュー（聴き取り調査）を行った。

主な質問項目は、伊藤(2000、2001、2003)や荒木・中澤(2007)を参考にし、

SCに対しては、

- ① SCの属性（年齢、性別、心理臨床にかかわる経歴・経験等）
- ② SCの勤務状況（時間数、待遇、カウンセリングルームの状況等）
- ③ 教育相談やメンタルヘルスに関して、“附属校らしさ・附属校ならではの”を感じる事
- ④ 大学との連携についての現状と期待

養護教諭に対しては、

- I 養護教諭の属性、学校概要
- II SC導入の経緯
- III 教育相談やメンタルヘルスに関して、“附属校らしさ・附属校ならではの”を感じる事
- IV SCの活動に対する期待・満足度
- V 大学との連携についての現状と期待

について、自由に語ってもらう半構造的面接方式とした。

なお、対象校は、公立学校に於いても最もSC配置が整っているのが中学校なので、それと比較対照しやすいよう、今回は附属中学校に限定した。インタビューの所要時間は、一人当たり40分～80分、SC・養護教諭共に全員女性であった。

以下に、各校の状況を事例として提示し、各校の個性と同時に、附属校としての共通性について考察していく。特に大学との連携に注目して検討したい。

【結果】

それぞれの学校に於ける聴き取り内容を、表1～表4にまとめた。

(表1～表4参照)

* 埼玉大学教育学部附属中学校スクールカウンセラー／埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター研究員

** 埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター

表1. A校での聴き取り

S C	①S Cの属性	30代、臨床心理士、児童養護施設勤務、院生時にメンタルサポーター
	②S Cの勤務状況	院の（大学教員と知己で、他附属校でS Cをしている）先輩からの紹介で、H20年度2学期から採用。／週5時間。1年目は後援会予算。2年目以降、大学＋後援会。時給4000円。／職員室に席がなく、会議室に居る。毎回、昼休みに関係教員とミーティング。／授業中の勝手な行動や授業妨害が目立つ発達障害のある生徒がおり、教員が理解と対応に苦慮し、現在は週2回、授業に入って個別サポート（見守り）をしている。／生徒がじっくり相談する場にはなりにくい。空き部屋が少ないため、相談室が相談以外にも使用されているので、生徒の自由来室を促しにくい。／図書室が生徒の憩いの場になっており、S Cが図書室に生徒の様子を見に行ったり、司書教諭と情報交換を密にしたりしている。
	③教育相談やメンタルヘルスに関して、“附属らしさ・附属ならではの”を感じることに	校舎の造りが特殊。教室の様子が外から見えにくく、自由に校内を参観しにくい。また、教員は授業に力を入れているので、S Cは気軽に教室に入出入りできない。／部会は不定期開催。学年会に機会があれば参加。／附属小から附属高まで上がれるのはエリートという認識が親の中にあり、我が子がコースからはずれると、母親も仲間の輪からはずれてしまう。／通学圏が広く、継続的な保護者相談が難しい。また、公的な相談機関も利用しにくい。／社会的地位の高い保護者が多く、（たとえ家庭内に大きな問題を抱えていても）プライドが壁になって、相談につながりにくい。／教員も学力や成績で子どもを見る傾向がある。（「なんで、あいつが、あんなにできる奴とつるんでるんだ？」というような発言）
	④大学教員との連携についての現状と期待	大学がLDの研究に力を入れているので、大学と附属小とのつながりは強い。附属小には、院生も入っている。中学生でも、LD傾向の生徒を、大学の相談センターに紹介することはある。
養護教諭	I 学校概要	50代、養護教諭歴25年、附属高校を経て附属中に異動。／学区域が広く、近隣県からも通学。週1日、100分×4コマの授業あり。その後に通塾している子も少なくない。／教員は、学校単独採用で異動なし。大学教員となって退職する人も少なくない。研究志向。男性が多い。／学校の教育目標（自分で課題をみつけ、それに取り組む力を育てる）と、家庭の思い（進学校の一過程）とがずれてきている。学校ではのびのびしていても、家ではキッチリ勉強している生徒が多い。
	II S C導入の経緯	特別支援教育の調査目的で、院生が附属小学校に入るようになった。その後、附属高校にS Cが配置。附属中学では、S C受け入れのイメージができずにいたが、対応に苦慮するケースが増え、また養護教諭が高校から異動になったことを機に、附属小・附属中にも導入することになった。
	III 教育相談やメンタルヘルスに関して、“附属らしさ・附属ならではの”を感じることに	家庭がしっかりしているので、内科的・外科的な訴えは多くない。不登校もポツポツ程度。不登校傾向はいるが、担当が対応している。／大学と附属小の相談部と合同で、ケースによって柔軟に、特別支援委員会を実施している。
	IV S Cの活動に対する期待・満足度	保護者対応を、きちんと時間を設けて行える。／学校の中にいるカウンセラーとして、連携がとりやすい。／勤務時間内に、教員と情報交換をするのは制約がある。
	V 大学教員との連携についての現状と期待	附属校内に、大学教員（学校カウンセリング等とは異なる専門分野）が常駐している。／特別支援委員会チーフ（主任）を通じて大学に要請すると、院生をメンタルフレンド（支援員）として派遣してくれる。

表2. B校での聴き取り

S C	①S Cの属性	50代、臨床心理士、児童相談所（心理判定、児童福祉士）・保健所、H7～公立校S C、B校出身
	②S Cの勤務状況	配置2年目。不登校（ここ1～2年増加し昨年度は20人近く）、相談室登校生（7～8人、他に保健室登校も）への対応。「見ているよ」というメッセージを伝え続けることが大切と感じる。教員との情報交換。保護者面接。／情報交換は主に養護教諭と。校内体制のコーディネータは生徒指導主事と。／相談室（保健室向かい）、職員室。ただし相談室登校生がいると、個別に相談する場所がない。／時間数や待遇は公立に準じる（国の緊急支援予算）。／公立校で一緒だった（顔見知りの）教員たちもいて、S Cの受け入れとしてはスムーズ。S Cの活用の仕方が、教員の中に浸透している。
	③教育相談やメンタルヘルスに関して、“附属らしさ・附属ならではの”を感じることに	大事に育てられている子どもたち。反面、ひ弱さを感じる。学校全体のレベルが高い中で、自分に自信が持てない子が多い。親は熱心で、子への期待が高い。親の望むような自分でなければいけない、と一生懸命。／中1ギャップが顕著。外部生は、集団のトップにいたのが、いきなり挫折を体験し、早い時期に息切れ。内部生は、学力的についていくのがしんどくなってくる子がいる。コミュニケーション力重視（グループ討論等が多い）の授業が苦痛になる。／発達障害に対して、附属校間の連携のもと、幼児期から思春期にわたる長期的サポートが可能なケースも。一方で、「我が子に障害なんてあるはずない」と思っている親に、理解を促したり査定したりが難しい。／積極的にS Cを保護者につなぎ、面接に同席を希望する教員も多い。若い男性教員にとって、S Cの母親との接し方がモデルになっているよう。／保護者の教育水準や意識が高いので、外部機関（医療も含む）は、保護者が自発的に選択・利用していることが多い。一方で、広域から通学してくるので、学校の在る地域の教育センターを利用することが難しい。／地方では、高校からの転入が難しいため、父親が単身赴任（特に海外へ）している家庭が意外と多く、父親不在の問題が感じられるケースもある。
	④大学教員との連携についての現状と期待	校内不登校対策委員会を年2回実施、大学教員がS Vとして参加。／大学の相談室（臨床心理士養成の院生の実習の場）へ通所しているケースもあり、必要に応じて連携。／元々、県臨床心理会で大学教員と知り合いだったので、院生のゼミ（メンタルフレンドで派遣されてきている院生に対するグループ・スーパービジョン）へ、S Cも参加させてもらうようになった（勤務時間外で月1回）。支援する側にも支援が必要だと思う。／また臨床心理士会で、附属小S Cとも顔見知りなので、個人的に情報交換可能。／発達障害に関して、大学との連携でS S Tやピアサポートのプログラムを展開できれば、と思う。
	I 学校概要	40代、養護教諭歴24年、附属校5年目。／教科準備室や空き教室が全く無く、不適応を示す生徒への別室対応が困難。／教員は、県の交流人事。／生徒指導部・教育相談部がそれぞれあり、週2回、部会開催。生徒指導主事が、S Cや大学・四附属委員会との窓口（コーディネーター）。／養護教諭2人体制。うち1人は補助的立場で、主教諭の不在時には助かるが、業務の分担や立場の違いを、生徒は認識していないという難しさもある。
養護教諭	II S C導入の経緯	震災対応で大学が国の予算で配置。急遽、昨年7月から。県臨床心理士会を通じて（公立と同様に）公募。2年目は継続となったが、国の予算がなくなった後はどうなるかわからない。
	III教育相談やメンタルヘルスに関して、“附属らしさ・附属ならではの”を感じることに	学力は高いが、対人関係に問題のある生徒たちがいる。が、これまでは、無事進学していけばOKとされて、問題性の認識が学校側に低く、支援体制も薄かった。
	IV S Cの活動に対する期待・満足度	S Cの専門的なアドバイスや見立てが、養護教諭自身の対応に安心感や自信を与えてくれる。／院生では、教員との情報交換や保護者対応が不十分。教員もS Cを頼りにしている。／継続的な保護者面接が可能になった。
	V大学教員との連携についての現状と期待	大学実践センター（現在は臨床心理専攻に異動）の大学教員が、5年ぐらい前から学生の教育活動の一環として、（S Cの不在日に）相談室登校対応のボランティア学生を派遣。しかし特に大学教員からの直接的なサポートは無く、院生とも情報共有が難しい。向かいの部屋にいたので養護教諭が様子を聞く程度。S Cが大学のゼミ（実習ミーティング）に月1回参加してくれるようになってから、つながりができた。／震災後のメンタルケア・プログラム導入で、大学とのつながりが強まった。

表3. C校での聴き取り

S C	①S Cの属性	30代、臨床心理士、公立校S Cを約9年、病院臨床
	②S Cの勤務状況	前任S Cから引き継いで4年目。現副校長が県教委にいたときに縁があり採用。週4時間、公立と同様の待遇。/S C配置以前から、教職OBの教育相談員が、S Cとは別の日に週3日勤務（公立校と同様）。日誌で連絡。/S C・相談員共に普段は職員室にいて、昼休み・放課後に、相談室に来室する生徒との面談、教員との情報交換。/1年生のグループ面談は相談員が担当、生徒支援委員会にはS Cが参加と、役割分担。/家庭訪問も保護者面接も、皆教員が行っているので、「お手伝いします」と声をかけるのが遠慮される感じ。（逆に、公立校では、丸投げされる経験も）
	③教育相談やメンタルヘルスに関して、“附属らしさ・附属ならではの”を感じることに	教員がいろいろな業務を抱えていて、教育相談メインで動くようなことは少ない。/保護者の相談はさほど多くなく、生徒と半々程度。電話相談もたまにあり、匿名を希望されることが多い。附属小からの親同士のつながりやプライドが影響していると思われる。親子共にコンプレックスが強く、隣の芝生が非常に青く見えるよう。/家庭の教育力の高さが、子にとってプレッシャーになっている。家庭全体が問題を抱えているケースもある。/学外の公立適応指導教室は、保護者も教員も望まない（連携のとりにくさ？プライド？）。一方、学校を介さずに、医療機関や児童相談所とつながっているケースもある。
	④大学教員との連携についての現状と期待	大学の心理サポートセンターの大学教員が、主に附属小学校からの相談を受けている。/実質的には大学や附属小との接点はない。医学部との連携も無い。/公立校S Cもやっているのので、そこでの仲間関係でなんとかやれている。/S Cとしての安心感を増すためにも、大学との連携がほしい。
養護教諭	I 学校概要	20代、養護教諭歴6年、附属校2年目。これまでは田舎の小規模小学校に勤務していて、S Cはいなかった。/生徒は自力通学圏内。8割は自転車通学。/教員は、県の交流人事。約7年で異動。女性教員の任期は3年程度。/保健室・相談室に関しては、全般的に理解があり、教員がよく足を運び、声掛けしてくれる。
	II S C導入の経緯	教育相談員・S C共に、公立校への雇用の一環として、県が公募。
	III 教育相談やメンタルヘルスに関して、“附属らしさ・附属ならではの”を感じることに	家庭の教育力が高く、子どもたちが内心にプレッシャーを感じている。/素直な子が多い。/公立校にいれば上位層にもかかわらず、附属校の要求水準についていけない子たちもいる。/保健室から出たがらない。/文句を言う。人のせいにする。自分で決められず、「どうしたらいい？」といちいち聞いてくる。
	IV S Cの活動に対する期待・満足度	教育相談員には日常的な情報交換、S Cにはより専門的立場からのアドバイスを期待。対応の仕方を教えてもらえて心強い。教員も、S Cと相談員の違いを認識していると思われる。
	V 大学教員との連携についての現状と期待	医学部精神科医が、(名前だけ)校医。校医を中心にした連携が欲しい。/大学の心理サポートセンターに要請すれば、スーパービジョンに来校してくれるらしいが、密な連携は無い。

表4. D校での聴き取り

S C	①SCの属性	50代、臨床心理士、児童相談所（心理判定）・保健所・適応指導教室・大学学生相談、H8～他県公立校SC
	②SCの勤務状況	配置4年目。SC配置以前は、大学の教育実践総合センター（以下、センター）の教員や附属校教員OBが、要請があったときに相談に応じていた。／近年相談の質・量ともに重くなり、専門性や相談時間の確保が求められ、知己の大学教員の声掛けで採用。／保護者面接のニーズが高い。／若い男性教員が多いので、教員と母親のつなぎ役割に重点を置いている。／窓口は主に養護教諭。／ほぼ相談室（保健室隣）に居る。職員室には席無し（教員も各教科準備室にすることがほとんどで、職員室は大抵無人）。／時間数や待遇は公立校に準じるが、大学の雇用。教員の大幅な超過勤務が常態化しており、教員と個々に情報交換をしようとする、SCの勤務時間も夜に超過する。／SC配置に伴い、校内生徒指導・教育相談連絡会を立ち上げた。毎週、SCも参加。
	③教育相談やメンタルヘルスに関して、“附属らしさ・附属ならではの”を感じることに	親は熱心で、子や学校への期待が高い。体裁を保つことに必死で、親同士も表面的なつきあい。本音が出せず、苦しさを抱え込む。実際は、公立校と同様の様々な問題を抱えている家庭が多い。生徒の表す問題も、同様に多岐に渡る。／教育相談や生徒の心理的問題に対する教員の理解度はさまざま。全体的には、生徒指導・緊急対応・メンタルヘルスへの対応の経験が乏しい教員が多い。／地域の外部機関との連携が無く、利用勧奨に留まる。SC自身、活動基盤が他県であるため、地域情報やネットワークが無くて心細い。／附属小や帰国子女等、子どもの問題に保護者間の対人関係が絡んでいることが少なくない。
	④大学教員との連携についての現状と期待	SC配置以前は、附属校の相談を大学のセンターで行っており（附属幼小・特別支援学校は、現在もセンターの教員が対応）、センター教員とは必要に応じて情報交換。／生徒や教員向けに心理教育を実施するのに、センターのみならず、心理系の大学教員にぜひ講師として協力してほしい。
養護教諭	I 学校概要	30代、5年（+臨時採用2年）、附属校3年目／教員は一応県の交流人事だが、勤務年数が長く、多くの人は現場には戻らず、委員会や管理職になる。／後ろ盾としての教育委員会がなくなり、守られている・母体がしっかりあるという感覚がもてない。／大学はどこまで把握しているのか、何かあった時、大学は責任を取ってくれるのかわからない。／市や県から回ってくる文書や情報がなく、不安。／地域のモデル校と言われているのに、地域から浮いているように感じる。／研修機会も自分でみつけないと無い。
	II SC導入の経緯	大学のセンター教員が、業務の一つとして附属校園の相談を受けていたが、相談数の増加・相談内容の重篤化に伴い、大学教員側の負担が増加。／教員OBが、ときどき個別相談に応じていたが、専門性や客観性を必要とするケースが増加。／特に、適切な保護者対応や、疲弊している教員へのサポートができる専任相談員が切望された。
	III 教育相談やメンタルヘルスに関して、“附属らしさ・附属ならではの”を感じることに	公立校には相談員（非臨床心理士）はいるが、SCはときどき巡回で来るだけだったので、ケースをつなげにくく、ディープな相談を持ちかけにくかった。相談員には必ずしも専門性が無く、学校の意図を理解しつつ相談室を運営できるのか信用がかけないことがあった。／附属校ではSCに専門性があり、毎週定期的に来校してくれるのが心強い。保護者と話をし、すぐにSCにつなぎやすい。「どうしたらいいの？」と問われると、養護教諭として何か適切に答えてあげなくてはと、答えることが負担だったが、SCのサポートがあるので安心して対応できる。／各学年の保護者会で、養護教諭が話す機会が設定されており、（保護者の前で話すのは大変だが）「保健室の先生」ではなく「〇〇先生」と名前で認識され、保護者が来談しやすいようで、うれしく感じる。／保護者との距離が近く、プライドが高い保護者にも「どうぞ相談に来てください」「何でも言ってくださいっていいんですよ」と言えるし、こちらからも声をかけやすい。担任が言うより構えずに、保健室に来るついでに養護教諭から声をかけたり、それをSCにつなげたりができる。／公立校と比べると、校内体制の整備が不十分。公立校は、生徒指導と教育相談担当がそれぞれいて、部会も分かれていたが、ここは何でも学年主任が担われるし、1時間の連絡会では討議が深まらない。／これまであまり必要とされなかったのか、それとも対応してこなかったのか、教員に教育相談や特別支援教育に対する意識が低く、知らないことも多い。／問題を抱えている生徒でも学力は高いので、それなりに卒業・進学していけば、「ちょっと変な子だった」で終わってしまい、それ以上に進まない。／職員室が空っぽで無いようなものなので、情報共有やちょっとしたつぶやきが教職員間で広がらない。こちらからいちいち足を運ばないといけないので、教員同士の関係が閉鎖的だったりつながらなかったりする。／保健室への来室人数は、公立校より少ない印象。自分は日頃から、保健室であっても、ダメなものはダメと指導している。これまでは、指導をされた子でも、「先生、ちょっと…」と相談に来た。が、附属校の子は一度叱られると、すぐに「もう、この人イヤ」と、相談に来なくなる。／附属校では、（親子共に）一度失敗すると取り返しのつかない人生の挫折・汚点のように感じやすく、打たれ弱い。／一方で、大人慣れしているのか、大人の前では「ハイ、ハイ」と応え、陰でいろいろ文句を言っている。／高校受験のストレスを訴えてくる時期が早過ぎる。公立校では、「受験でうちの子がおかしくなった」という言い方をしてくる親はいなかった。
	IV SCの活動に対する期待・満足度	カウンセリング（特に、問題の見立て）についての専門性。／学校の状況を把握・理解していること。／SCの得た情報の共有またはフィードバック。／できれば、週2日以上勤務を望むが、限りがある中では、活動内容の幅を広げるより、相談活動と情報共有の充実が最優先。／保護者にもっともSCを活用してもらって元気になってもらいたい。生徒には日々教員が接していて、その中で必要を感じたらSCにつなぐことができる。むしろ、保護者相談を優先させたい。／公立校では、家庭に問題があることが見えていても、保護者を当てにできないので、生徒本人をSCにつなぐことがあった。附属校は、一見保護者がしっかりしているが、その分偏りがあるので、保護者にSCに来てもらい、保護者をほぐすことが有効。／SCに直接相談に行く保護者は、そう多くない。つなぎ役（本校では自分）の対応・勧め方が大事だと思っけて心にかけている。／公立校では、生徒をSCにつなげるにあたって、保護者の許可をとる（少なくとも管理職に打診）必要があった。そのため、SCにつなげることは敷居が高く、養護教諭にかかる負担感が大きかった。その点、附属校ではSCに気軽に近づけられる。／SCの存在が教員全体に浸透している。
	V 大学教員との連携についての現状と期待	連携はできていないと感じる。研究や実践等、“お願い”すれば見て（指導して）くれるが、全部こちらでお膳立てしないと行けないので、かえって負担が大きい。／大学の先生の講演は、聴くだけで終わってしまうことが多い。現場や日常の様子を知ってもらって、具体的な事例に即して話をしてもらえの方が、教員には浸透する。授業研でも、実際の授業後のコメントの方が、納得できる。／大学の教員が何をしてくれるのかわからないので、大学の方から、提案して入ってきてくれる方がありがたい。／大学に養護教諭養成課程があり、健診時等、人手がほしいときに頼める。（学生にとっても実習の機会になり、お互いにプラス）

【考察】

(1) 各校の個別性から見えてくるもの

～学校独自のニーズ・課題、大学との連携の 具体例

A校の場合は、教職員を学校が独自に採用しているところに特徴があると言えよう。一つの大学のもとに、キャンパスの異なる複数の附属校園を併設しているため、大学教員を交えて、それらの学校間での連絡会が行われている。

しかし、地域との結びつきや情報・人事の交流は不活発となる。また教員は、教育水準の高いA校で働くことへの自負心が強く、教員自身も上昇・研究志向の高い人が少なくない。一方で、生徒の心理面に対する関心や、昨今の生徒指導や教育相談の問題についての知識や経験は多いとは言えない。

SCに対する学校側の要望が、主に教室内で不適応を起こしている生徒に付き添って、個々にサポートしてほしいということであり、そのためSCの活動もやや限定的である。また、SCが生徒指導や教育相談の分掌に位置付けられていないため、学校全体を視野に入れた活動とはなりにくい。だが、養護教諭をはじめ、生徒の心理的問題にアンテナの高い教員や、ニーズのある一部の教員との連携は緊密に行われている。特に、A校では図書室が生徒の憩いの場所として利用されており、そこに入りする生徒にさりげない目配りをしている司書教諭の役割はユニークで、SCとの情報交換も積極的に行われている。

B校の場合は、震災による緊急支援として、その地域の公立校と同様に、国の予算でSCが暫定的に配置されることになった。配置されたSCは、公立校での経験も豊かで、さらにB校出身で校風等をよく知っていることもあり、教員集団の中に自然に溶け込んでいる様子が見られた。

大学と徒歩数分の場所に立地しているという利便性もあり、心理系の大学教員が別室登校の不登校生徒の支援に、大学院生を派遣してきたり、震災後の心のケア・プログラムを展開したりしている。しかし、そういった大学からの働きかけは、養護教諭とは別の研究主任等が窓口になっているため、必ずしも日々生徒と関わっている教員たちと大学との連携がよいとは言えず、特に養護教諭は派遣されてくる大学院生にどの程度関与するべきか戸惑うこともあったようである。SCが、附属校の現場と大学側のつなぎ役として、(勤務時間外ではあるが)大学のゼミやケースカンファレンスに参加させてもらうようになり、漸く情報交換が可能になったとのことである。

C校の場合は、地域の公立校と同等に、県の教育委員会からSCが派遣されている。また、教職員も県との人事交流が盛んで、特に養護教諭は約3年の短い任期で公立校に戻る。また、養護教諭には研究活動の要請もほとんどないとのこと、他の3校に比べると、附属校の教員

という気負いが少ないように見受けられた。しかし研究活動が少ない分、保健室に於いては大学との接触機会がないとのことであった。

さらに、その地域では県のSCとは別に、市が相談員を配置している公立校が少なくないとのこと、C校に於いても同様に、SCとは別の曜日に相談員が勤務している。SCと相談員は顔を合わせる機会がないため、両者の連絡には工夫が必要となる。部屋も兼用しているため、生徒や保護者には両者の違いはあまり意識されていない。初回に出会った方が、そのケースの主担当になるが、必ずしも明確に分担できる訳ではないので、日誌や養護教諭を介して情報交換している。

養護教諭の話からは、教員側ではSCと相談員の役割や専門性の違いについては認識している、とのことであったが、SCはその点には戸惑いを感じているようであった。さらに、SCは生徒支援委員会には参加するものの、生徒全員面接(1年生対象)は相談員が実施しているため、生徒や学校の全体像を把握しにくく、学校全体に対して積極的に働きかけることが難しいようであった。そのため、SCの活動も、来談した生徒や保護者に対する個別相談が中心となっている。

D校の場合は、SCの配置にあたり、相談業務に専従できる専門性の高いSCを求めるという点で、大学側のニーズと附属校側のニーズが合致した。近年、対応に苦慮するケースが増え、それまでは大学の実践センターの心理系教員が、業務のかたわらに附属校ケースの相談を請け負ったり、養護教諭や教員OBらが保護者の対応をしていたりしたが、それでは時間的にもスキルの間にも合わなくなってしまったとのことである。また、採用の経緯にあるように、SCと大学の教育心理分野の教員が元々知己の関係で、必要に応じてSCが大学教員と情報交換したり助言を仰いだりの連携が可能である。

このように、D校ではSCの専門性や教員・保護者に対するサポートへのニーズが高いため、SCの勤務日に生徒指導・教育相談の部会が定期的に開催されており、学校全体への関与が円滑である。生徒の自由来室は少ないが、気になる生徒や保護者を、養護教諭がうまく呼びかけてカウンセリングにつないでくれている。さらに、相談が終わってからの、担任や関係教員へのコンサルテーションも盛んで、学校はSCを非常に積極的に活用している。

以上のように、附属校に於いても学校の事情は各校各様である。特にSCの導入の経緯には、学校独自の事情が色濃く反映されていることがうかがわれた。さらに附属校のSCの相談活動は、公立校同様に、学校独自のニーズや課題に合わせて、バリエーションをもって展開されていることが示された。公立校であろうと附属校であろうと、SCは、学校の特性、言い換えれば学校要因(伊藤1999)に応じて、活動の重点を柔軟に変えていくことが必要であると言えよう。

また、学校カウンセリングに関する大学との連携の状況については、いづれも充実した形が整っているとまでは言えないが、(C校以外では)実践されている連携のいくつかが例示された。

(2) 4校の共通性から見えてくるもの

～“附属校ならではの”の特性にもとづく課題

附属校は、各学年4学級編成、都道府県の中核都市にありながら閑静な地域に広い敷地を有し、附属小から約半数の生徒が進学してくる等、学校規模や環境は全国的にほぼ同じである。設置母体である国立大学との連携のもと、各県下の教科教育の先進的な取り組みや研究推進校とされていることや、毎年多数の教育実習生を大学から受け入れて指導すること等、附属校の担っている役割も共通しており、そのため教員は公立校以上に多忙を極め、教員の構成も若手の男性が多い等、その特徴も類似している。

また、選抜試験を経て、能力や教育に対する意識の高い生徒・保護者が、かなりの広域から通学してくる。多くの保護者は、進学校としての指導を期待しており、他の家庭との競争意識が強い。生徒はいわゆる優等生的な大人びた雰囲気の子が多く、非行や問題行動等は極めて少ないが、一方で、対人関係や心理的問題を内在・潜行させている子もいる。常に高いレベルの学業・行動パフォーマンスを求められ、下校後も夜遅くまで通塾する等、心身共に余裕がなく疲れているように見受けられる。さらには学力を基準とした選抜試験では、発達障害や家庭環境の問題を抱えているケースも入学してくるにもかかわらず、教員側にその認識や問題意識が不十分で(高橋他2011)、対応が後手後手になりがちである。このような教員・生徒・保護者の状況は、附属校に共通する“附属校ならではの”の特性と言えよう。

さらに、教科教育に関しては、大学と連携しながらの地域に対する発信・啓蒙活動が、積極的に実施されているのに、公立校のように教育委員会の指示系統下にはないので、県や市からの情報が回ってこなかったり、研修や交流の機会が限られていたりするという点も、附属校に共通していると考えられる。特に養護教諭は、学校内にあってもほとんどの場合一人職種であり、教科教員に比べると研究や授業に携わることが少ない分、大学の教科の研究室とのつながりも少ない。D校の養護教諭の意見にあるように、地域や教育委員会の後ろ盾がないことで、(公立校に勤務していた頃に比べて)心許なく孤立感が強いが、それを訴える場もないようである。また、生徒の居住地が広域にまたがっており、中には学校のある市区さらには県外から通学している場合もあり、学校外の公的な専門機関(教育センターや福祉サービス等)と連携を図りたくても対象外とされることがある。

教科教育に関する連携のみならず、教育心理や精神保健分野に関しても、教育委員会や公的機関等の地域資源

に代わるものとして、附属校としては大学からのサポートがほしいところである。しかし残念なことに、今回の調査対象校では、大学に附属校の状況や希望・要望を伝えたくても、日常的・継続的な接点がほとんどなく、また、附属校の教員は、大学のどこが(誰が)窓口になるのかわからない・知らないとのことで、国立大学の附属であることの利点が活かされていない現状がうかがえた。

一方で、太いパイプとまではいかないが、B校やD校のように、SCが大学教員との接点・つなぎ役割を担っている学校や、高柳他(2011)の報告にあるように、SCを活用しながら附属校と大学との連携体制を構築している学校もある。

大学との連携は、養護教諭のみならずSCにとっても、ケースのスーパーバイズや心理教育プログラムの実施等で支援を受けられ、心強い後ろ盾となりうる。先進的な取り組みを参考にしながら、学校カウンセリングやメンタルヘルス分野での、附属校と大学との機能的な連携の形を模索していくことが今後期待される。

【まとめと今後の課題】

今回の調査によって、附属校に於いても、SCはその学校の抱える課題や特性(学校要因)をよく知ったうえで、学校独自のニーズ・状況をアセスメントして、柔軟な活動を展開することが重要であること(相澤・佐藤・鈴木他2005、相澤2011)は、公立校に於ける学校カウンセリングと変わらないことが示された。

その一方で、附属校には共通する“附属校ならではの”の特性やそれにもとづく課題があるので、今後は各校のSC同士がネットワークをつくり、附属校ならではの経験を持ち寄り蓄積していくことで、より充実した活動を提供できるのではと考える。

“附属校ならではの”の問題の一つとして、養護教諭は生徒や保護者のこころの問題に対応することが多いにもかかわらず、教育委員会をはじめとする地域資源とも大学ともつながりが少なく、心細い思いをしている。SCの存在がそのような養護教諭の支えになるという声が多く聴かれた。

また、養護教諭にとってもSCにとっても、大学の機能や人材を活かした連携が望まれるところであるが、現状は不十分であると言わざるを得ない。大学教員側にも、どうすれば附属校の力になれるのかわからないという声があり、互いに、「近くて遠い関係」にあることが感じられた。

しかし、今回の調査でも、連携についての課題を改善し発展させていく糸口となりそうな実践例がいくつか提示された。今後は、例えば大学教員の専門性を明示する一覧表作る、教育委員会による聴き取り訪問に代わる形での交流(大学教員の聴き取り訪問)を行う、大学教員を交えた研修会やケース検討会を定例化する等のさらなる連携のアイデアについても、その実現可能性や効果

を検討していく必要がある。

さらに何と言っても、附属校の校長は、大学教員が兼務しているので、校長を窓口として活用し、校長に附属校の声を大学に届けてもらうような、積極的仲介を依頼したいと考える。

なお今回は少数校を対象にしたインタビューによる予備的調査で、学校カウンセリングに関する大学と附属校との連携の実態のサンプルのいくつかが示されたに過ぎない。今後の研究では対象校を増やして、附属校全体の状況を把握したい。そのうえで、SCの活用や大学と附属校との効果的な連携の形を提言していきたいと思う。

【参考文献】

- 相澤直子 2011 中学校におけるスクール・カウンセラーの活動～導入期の留意点について 埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要10, pp37 - 44
- 相澤直子・佐藤いづみ・鈴木悦子・加藤恵・福田智子・松崎こづえ・田島悦子・宮崎富喜子・細谷和代 2005 私立女子中学・高等学校における学校カウンセリングの実際 聖徳大学研究紀要 短期大学部38, pp41 - 48
- 荒木史代・中澤潤 2007 スクールカウンセラーに対する教師のニーズ 千葉大学教育学部研究紀要55, pp87-95
- 伊藤美奈子 1999 スクールカウンセラーによる学校臨床実践評価ならびに学校要因との関連 教育心理学研究47, pp521-529
- 伊藤美奈子 2000 スクールカウンセラー実践活動に対する派遣校教師の評価 心理臨床学研究18 (1), pp93-99
- 伊藤美奈子 2001 学校側から見た学校臨床心理士(スクールカウンセラー)活動の評価—全国アンケート調査の結果報告 臨床心理士報2001, pp21-42
- 伊藤美奈子 2003 保健室登校の実態把握ならびに養護教諭の悩みと意識—スクールカウンセラーとの協働に注目して— 教育心理学研究51, pp251-260
- 常務理事会総務 2006 平成17年度悉皆調査報告 日本教育大学協会養護教諭部門 全国国立大学附属学校連盟養護教諭部会 研究集録41, pp92-95
- 常務理事会総務 2010 平成21年度悉皆調査報告 日本教育大学協会養護教諭部門 全国国立大学附属学校連盟養護教諭部会 研究集録45, pp121-124
- 高橋智・石川衣紀・田部絢子 2011 国立大学附属小学校における特別支援教育の現状と課題—管理職・特別支援教育コーディネーターおよび養護教諭への全国調査から— 日本教育大学協会研究年報第29集, pp219-229
- 高柳佐土美・木次昭子・齊藤理紗子・石井夕貴 2011 教育相談等に関連する問題解決の方法「千葉大モデル」の作成に向けて～スクールカウンセラーとの連携に関する調査～ 関関連養護教諭部会発表資料
- 吉田圭吾 2011 国立附属学校におけるスクールカウンセリング 臨床心理学増刊第3号, pp36-40

【付記】

多忙な業務の中お時間を割いて、快くインタビューに応じてくださり、興味深い現場のお話をお聴かせくださいました養護教諭・SCの方々に、深謝申し上げます。